

# 福岡工業大学 機関リポジトリ

## FITREPO

Title	日本の英語放送とその教育的利用及び体験的英語訓練
Author(s)	古明地勝美
Citation	福岡工業大学研究論集 第39巻第1号 P69-P79
Issue Date	2006-9
URI	<a href="http://hdl.handle.net/11478/845">http://hdl.handle.net/11478/845</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Fukuoka Institute of Technology

# 日本の英語放送とその教育的利用及び体験的英語訓練

占明地 勝 美 (社会環境学科)

## English Broadcasts in Japan – their educational significance and a training arena for English specialists

Katsumi KOMIJI (Department of Social and Environmental Studies)

### Abstract

Today the Japanese television and radio play important roles where they provide varieties of programs in English. The volume of English broadcast has been expanding dramatically and their contents have been changed drastically as well. The use of authentic material from the broadcast for English education has been sought after and the chances are ever widening. The government is now thinking of creating a complete English TV channel for the domestic service in the near future which might be providing another opportunity for English course students and English educators to learn more from broadcast and to offer changes in educational styles.

It is quite obvious that the proper use of TV and radio for educational purposes would bring about great benefits for both students and educators and also further studies on the better usages of media for English education should be continued.

Keywords: *broadcast English, TV & Radio, English lessons, NHK, English announcer*

### 1. はじめに

語学習得のための放送のもたらした効果はいまさら言うまでもないが、日本ほど語学教育にメディアがこれほど時間と労力をつぎ込んでいる国も数少ないのではないだろうか。

ラジオ英語講座は1925年にスタートしたと言われる。80年を経た今もその形態を変えながら放送英語教育はますます盛んになっているといえる。マクロで捕らえれば民放、NHK 双方で英語教育番組は放送されているが集中的にはやはりNHK教育テレビ、およびNHK第2放送が圧倒的なボリュームで英語教育番

組を作成、放送している。かつてNHKが英語講座をスタートさせた1925年(大正14年)はまだ大正デモクラシーの余韻がこの時代で日本では世界に羽ばたくための道具として英語が必要視されていた。平成の時代とやや似通っているとも言われる。その時代早くも口語英語が叫ばれ会話を中心とした英語講座が考えられていたという。「歴史は繰り返す」とはまさにこのことであり、80年前の英語関係者は現在とよく似通った英語への感覚を持っていたようである。その後時代は急速に軍国主義の道を歩み、英語は敵性語と見なされ戦前、戦中は英語講座は中止された。しかし1945年(昭和20年)には早くもラジオ英語講座は再スタートしたのである。

今日ではテレビ、ラジオは英語講座のみならず、様々な英語放送を送出しているがこれらはうまく使えばそ

の多くが大学その他で教材として使え、日本人の英語力向上にさらに大きく向上するはずである。海外留学したり高い料金を払って英会話学校に通わなくても着実に英語力を高めることが可能である。

本論文では英語講座から発して幅広く放送英語全体を英語教材ととらえてその現状を見据え、また効果的な英語放送の利用法とは何かを考え、最後に英語放送現場に居たものとしての放送現場の内情と英語アナウンスの仕事、訓練方法などについて言及してみたい。

## 2. 放送における英語講座

放送の英語に関しては英語講座が大きなウエイトをしめまた大きな役割を果たしてきた。民放もその役割をある程度になってきたが大部分はNHK教育番組がこの英語講座を提供してきた。

NHKは現在、教育テレビで英語、中国語、フランス語、イタリア語、ハンガール語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、アラビア語の9言語とその他としてアジア語会話、NHK日本語講座の全部で11カテゴリーの講座を放送している。

2006年度の英語講座に限って見てみると13講座が放送されている。これらを見ながら最近の講座の傾向と目指すものを検証してみる。

まずテレビは5講座あり、その中の新番組としては「新感覚☆キーワード英会話」(火～金午後11:00～11:10)がある。これは4月から9月までの限定放送であるが、英会話の基礎となる単語とその使い方をイラストなどで直感的に理解する入門講座である。中学レベルの単語約150の使いかたが1日10分でできるように工夫されている。また同じテレビの「3ヶ月トピック英会話」(木午後11:10～11:30)は4月から6月までは人気料理家、栗原はるみさんが英会話に挑戦する様子を中心に構成されている。栗原さんは持ち前の明るさとチャレンジ精神で毎回ネイティブと英語で交流している。また昨年度の再放送だが「ミニ英会話、とっさのひとこと」(月～水午前6:45～6:50)は6ヶ月間で毎回1～3フレーズ程度の基礎的な表現を楽しく学ぶものである。アメリカの現代表現なども紹介される。簡単な英語だが役立つ表現を学ぶことが出来る。やや応用学習的なものでは「テレビで留学」(火午後11:10～11:30)がある。これは4月から6月まではアメリカ・コロンビア大学初級英語講座であり、授業風景をそのまま放送している。日本にいながら大

学留学して授業を受ける感覚で学べる。留学志向の人にとってはいい企画であろう。さらにもう一つのテレビ講座としては「いまから出直し英語塾」(水11:10～11:30)がある。これは6ヶ月で好きなことを題材に英語を学ぶ趣向で、例えば「テニスで英語瞬発力をみがく」とか「英語落語で笑いを学ぶ」とか「シェイクスピア劇に学ぶ英語の台詞」などのトピックスが並ぶ。

これら今年度の英語テレビ5講座を見てみるとよりトピック別になっていることが分かる。一昔前は一つの講座に様々な要素が盛りだくさんにつめ込まれてオムニバスの講座が長年繰り返されてきた。また最近の講座は短い期間で完結する講座が増えている。3ヶ月とか6ヶ月ですべて終了しました新しいタイトル、内容の講座にしようとしている。これは現代人の多様性、ニーズに合わせていると思われる。内容も基礎から応用まで網羅していて小学生から大人までの学習者を対象としているのであろう。また最近のこれら講座は昔のいわゆる「勉強スタイル」の講座ではなく番組として楽しめるような構成になっている。この違いは放送大学の英語講座とNHK英語講座を比較すれば一目瞭然である。テレビはとにかく忙しい現代人に合わせたスタイルとなり常にその志向をさぐり今後も時代とともに変化していくことであろう。

一方ラジオ講座は8講座放送している。いずれもラジオ第2放送でラジオ講座はテレビと比べるとじっくり勉強する人を対象と考えているようである。1講座を除いて1年間のスケジュールで放送している。ラジオ講座は大きく分けて「じっくり学ぶラジオ講座」と「レベル別講座」にわかれている。前者には3講座あり、新番組の「徹底トレーニング英会話」(月～土午後0:25～0:40)「英語の筋肉鍛えます」のキャッチフレーズでリスニングに力を入れている。また「ビジネス英会話」(月～土午後11:15～11:30)は国際ビジネスで活躍するために必要な実践英語と経済知識を毎回学ばせようとしている。英語講座の中でもっとも程度の高いレベルの講座である。もう一つは「ものしり英語塾」(月～土午前7:45～8:00)でテレビ講座の大杉正明氏の「いまから出直し英語塾」のラジオ版の様相である。大人のための英語雑学を自負している。これらラジオ3講座はいずれも学生より社会人を意識したもので社会人でも聞きやすい時間帯に設定している。多くの社会人が通勤電車の中でポケットラジオで英語講座を聞いているという事実があるという。

その他のラジオ5講座はいずれも中学、高校生を対象にしたものでレベル別に、「基礎英語1」「基礎英語2」「レベルアップ英文法」「英会話入門」「英会話上級」となっている。すべて午前時間帯に放送され、再放送も数回設定されている。

これらのレベル別ラジオ講座はいわば伝統的な英語講座で多くの日本人が学んできたおなじみのラジオ講座である。しかしそのいずれも内容は口語英語、会話英語にシフトしているのは時代の要請であろうか。

これらの講座が作られ放送されるまでをかいつまんで見てみる。まず講師はいずれの講座も大学で教鞭をとるか、かつて教鞭をとったことのある人である。その講師、アシスタントの選定にあたっては1年近い時間を掛けて様々な角度から検討されているようである。講師はテキスト作りが3ヶ月前に完成しなければならないので執筆が時間的に大変な作業となる。間違いがないように何回も推敲され放送収録となる。収録はまとめて1、2週間分を収録することとなる。収録はリハーサルが最低2回程度あり、その後に放送用の本番を収録することになる。纏めて収録するので土、日などに朝から深夜までかかって毎週収録しているのが実情であろう。ラジオ講座は映像がないので作業工程が少ないがテレビはスタジオ収録、外部ロケ、背景デザイン、衣装など様々な作業工程がある。テレビ講座制作は普通のテレビ番組同様に高い番組センスが必要となる。

見えないところで大変な苦労がされて英語講座番組が完成されるのであるが講師、制作者に共通するのは「英語教育への熱い思い」であろう。日本の多くの英語教師はラジオ、テレビ英語講座で英語への興味へのほみを開かれ英語の道へすすんだ人が多い。かつて東京外語大学学長を勤められた小川芳男先生は戦後初めてのラジオ英語講座講師であった。英語の面白さから英語の学び方、根底の流れるものを伝えられたという。筆者の中学時代は松本亮先生の英会話全盛時代でラジオ講座が田舎では唯一、生の英語に触れる機会であった。先生のすばらしい発音、低音の魅力に引かれ中、高校時代5年間、ラジオ講座にかじりついたものである。日本人の多くに大きな影響を与えた英語講座は形を変えながら今後も最も有効で安価な学習手段として存在し続けるであろう。

### 3. 放送における英語講座以外の英語

最近では放送特にテレビにおいて英語関連番組が実によく増えている。例えば Sky Perfect TV では24時間の子供向き英語番組「GLC24時間英会話チャンネル」を放送している。これはイギリス BBC が制作した番組をそのまま放送しているが、最近の幼児英語教育熱への高まりとともに人気がでている。しかしやはり NHK が圧倒的に多くの英語関連番組を放送している。例えば総合テレビで人気のあるものとして「英語でしゃべらナイト」〈金午後11:00-11:30〉は内外の有名人を毎回登場させて英語によるバラエティショーを堂々と総合テレビに登場させ成功している。この番組には字幕スーパーまで入っている念の入れようである。この番組が一般社会人の生活に入り込んだ好例といえる。

さらに NHK は英語講座の範疇に入れていないが初心者に人気があるのは「100語でスタート!英会話」(火-金午後11:00-11:10)である。人気タレント、キャラクターを使っているが内容はアカデミックである。100語で初歩的な会話ができることが分かる。

さらに幼児向けとして「えいごであそぼ」〈月-金午前7:40-7:50〉とか「えいごリアン4」〈金午前10:15-10:30〉「スーパーえいごリアン3」月午前10-10:15)が引き続き人気番組となっている。幼児英語教育、小学生英語必修化のうねりの中で子供向けの英語番組はますます力が入られ今後、さらに種類が増えていくものと思われる。

これら誰でも容易に見られる英語番組以外に余り知られていないのが BS (衛星放送) の英語番組である。主に衛星第1放送で1日数回、海外ニュースを英語で視聴することができる。現在では「アメリカ CNN ニュース」「アメリカ ABC ニュース」「ワールドニュースアジア」のダイジェスト版が毎日放送されている。また多くの海外番組、大リーグ中継などが副音声と共に2ヶ国語で放送されている。この副音声は多くの海外番組、ニュースがお茶の間に入り込む役割を果たしてきた。日本におけるテレビ音声多重放送が整備されたのは1990年頃であった。NHK、民放で開始され今ではニュース、映画、スポーツ番組、イベント中継など多くの番組で毎日のように実施されている。外国映画は元々外国語がベースであるので元の音声を送っているがニュースなどはニュースを翻訳しそれ

をネイティブあるいは英語に堪能な日本人がアナウンスしている。英語などの音声多重放送はもとと在日外国人を対象として始まったものであるが現在では多くの日本人が副音声聞いていることが統計で示されている。映画では「俳優の台詞は本当はどうなんだろう？」とか「元々のニュアンスを知りたい」という聴視者のニーズを満たすものとなっている。今や多くの日本人が英語への興味あるいは英語を学ぶためにニュース、番組の副音声英語を聞いているのである。ニュースはNHKでは現在19時と21時の定時ニュースで副音声英語を同時放送している。民放も同様に夕方と夜のニュースを副音声で英語放送を流している。また余り知られていないが大相撲放送も衛星放送では16時から打ち出しまで英語放送を行っている。また8月の広島、長崎平和式典なども日本語の裏で英語中継放送が実施されている。

洋画など副音声を使って2ヶ国語を聞かせるサービスは昭和40年代から各局が導入してきたがこれはもととステレオ放送のための音声多重放送のシステムを応用して原語で聴きたい人、翻訳で聞きたい人両方へのサービスとして定着している。洋画の2ヶ国語放送は原語のもつ迫力と微妙なニュアンスを伝えることが出来る。

さらに余り知られていないのが、NHK国際放送の英語番組である。

NHK国際放送は80年の歴史を持つが日本で最も早く、英語で放送を流した局である。戦前、戦中は「ラジオトウキョウ」でありプロパガンダをせざるを得ない残念な時期もあったが「日本の声」として長く海外向けに放送してきたのである。今では日本語を含めて21ヶ国語で放送し短波、テレビ、インターネットで視聴することができる。NHK国際放送の英語番組に焦点をあわせてみるとテレビは海外では「NHKワールド」と「NHKワールドプレミアム」に別れ前者は無料で視聴できるが限られた時間と内容である。

「NHKワールド」は日本語番組と英語番組が混在しているが50%以上は英語番組である。後者の「NHKワールドプレミアム」は有料放送で24時間NHKの殆どの番組を見ることが出来る。但し現地のケーブルテレビ、衛星放送と契約を結ばなければならない。国内でもいくつかの国際向け放送を見ることが出来る。英語番組ではBS1で「News Today 30Minutes」(火-土 4:15-04:45) また同じBS1で「What's On Japan」(日 4:10-4:45) またデジタル教育<マルチ編

成3>には「Weekend Japanology」(月0:40-1:25)がある。これらの英語番組は本来、海外の視聴者向けの番組であるがピックアップして国内に放送されているのである。

また古くからNHK国際放送になってきたものとして短波放送がある。これは英語を含めて21ヶ国語で現在も昼夜を問わず放送されている。英語番組に焦点をあわせると一日6回10-15分の長さで英語ニュースが放送され、ニュースに続いてニュース解説、音楽、情報番組などが放送されている。短波放送は日本ではなかなか聴取しにくいアンテナが茨城県にあるので短波の特性から関東近辺より遠ざかれば聞きやすい。最近では世界的にテレビ志向で短波の需要は少なくなってきたとはいえ、開発途上国を中心に短波はまだ存在する。この短波放送の英語ニュースは一日2回、14時と23時にラジオNHK第2放送でもそのまま流されているので多くの学生、英語講座を聞いている人がそのまま聞いている例が多い。

また数年前からインターネットでも国際放送を視聴できる。NHKワールドTVのニュース映像をはじめ、ラジオ日本オンラインでは現在放送されている。ニュースなどを「ライブ」で聴いたり、聴きたい言語でのニュース用には「オンデマンド」があり、クリックすれば聴くことが出来る。また英語情報番組の「Japan & The World 44Minutes」とか「Daily News」の一部や英語字幕ニュースなども見ることが出来る。また英語放送原稿の一部を見たり、ダウンロードすることも出来る。

これら以外で日本において聴くことの出来る放送としては、米軍放送のAFN(American Forces Network)があり現在は東京、三沢、岩国、佐世保、沖縄から主に中波(AM)での24時間放送が行われている。AFNは沖縄ではFMとテレビまた岩国、三沢ではテレビ放送も流されている。米軍放送AFNは多くのニュースを米本土またグアムなどから中継放送しているが内容的には米国中心、あるいは米軍向けである。ニュースの質およびアナウンス技術はまちまちであるがアメリカの放送の雰囲気は楽しむことが出来る。特に音楽などは最新のヒットチャートから聞くことが出来るしまた大リーグなどのスポーツ情報をいち早く入手することも出来る。

#### 4. 英語放送の教育への利用

放送を英語教育に効果的に利用している例は残念ながらあまり多くはない。まず放送の長さは授業の90分の長さになっていない場合が多いため放送そのものを大学の授業に当てはめにくい点がある。しかし放送に登場する英語は最新の話題が多く大いに魅力があるリソースではある。またラジオ、テレビ講座には最近の英語の使い方、言い回しなどもとりあげられていることがあり有用である。例えばある英語講座で次のような米語の俗語の使い方が紹介されていた。“His ride is tight”という言い方が米国の若者の中で交わされていて、この意味は“His car is nice”. と同じ意味だという。また“to drive”という代わりに“to cruise”も多く使うという説明であった。この様な使い方は米国によく足を踏み入れるか、最近の米国の若者と話を交わしていない限りなかなか知りえない使い方ではないだろうか。

英語放送をそのまま使うことは無理があるが、放送の部分的な利用は英語教育現場で可能であり、学生にとっても刺激的であると思われる。放送を利用する場合いくつかの注意する点、問題点を指摘してみたい。まず、放送には著作権があるので番組を収録してそのテープ、ディスクなどは学生などに販売することは禁止されている。あくまで教育機関での教育目的の限定使用が許されているに過ぎない。またインターネットなどでダウンロードした原稿なども同様な扱いとなる。また多くの大学などの教室の設備は生放送のテレビやラジオを授業に使うようには設定されていないことが多いので生放送から英語を学ぶ機会は少ないといえる。米軍放送や短波放送を生で教室で聴取することは可能であるがそれら放送のクオリティーが保障されないもので、いい状態で聞き取れるかが問題となる。本格的にはケーブルTVと大学が契約してBBCとかABCなどの外国放送をいつでもよい状態で視聴できる設備と体制の構築が必要であろう。これらを実施している英語専門学科もあるが教養科目として英語を学ぶ大学ではなかなか困難である。現実的には英語教師の情熱によりテレビ、ラジオ番組を録画、録音して適当な部分を教室で使用することが多いのではないかと思われる。将来的には実用的な英語を扱う放送番組がますます増え、教師側としては放送利用の英語授業はやりやすくなるが大学側の教室などのハード面の充実が欠かせない

いものとなる。あるいはインターネットと放送の融合が進みネット経由で放送英語を学ぶことになるかもしれない。いづれにせよ放送メディアは限りない可能性を秘めた英語教材の宝庫であるかもしれない。

#### 5. 日本における英語放送現場報告

最後に英語教材となる英語放送、放送原稿はどのような課程をへて電波にのり、テレビ、ラジオに到達するのか、そしてそれを放送に載せる英語アナウンサーはどのような仕事をし、またどのように自己訓練をしているのかの実体験に基づいて触れてみたい。

##### a 英語原稿

まず英語放送原稿について述べるならば、日本の中にはもともとオリジナルな英語原稿がない。従って基本的には初めから誰かが英語原稿を書かなければならない。英語ニュース原稿の多くは日本語ニュースを翻訳しているのである。日本語ニュースはどの放送局でも毎日膨大な量となって書き出されている。19時、または21時のニュースの項目はどれにするかは最終的には編集責任者の判断なのでしばしばでぎりぎりまで項目とオーダーが決まらないことがある。英語編集者はそのことを見越して殆どのその日の主なニュースを翻訳にまわしている。そして放送時間ぎりぎりにニュース項目が決まるとコンピューターからその英語原稿を取り出し、ニュースオーダーも日本語ニュースに合わせて準備を整えているのである。さて日本語ニュースはどのように翻訳されるのであろうか。

まず英語に堪能なライター（日本人またはネイティブ）が日本語のニュース原稿を基にして初稿というものを書き上げる。これをニュースデスクと呼ばれる中間編集者が内容と英語をチェックする。この段階で事実関係とともに外国人にも分かり易いかどうかチェックされる。例えば日本人ならば背景説明が要らない事実でも外国人には分かりにくいこともあるのでその場合にはオリジナルにない説明を付け加えるなどする。こうして半分完成した原稿をネイティブの校正者（proof reader）に廻し英語の間違いとニュアンスをチェックしてもらう。出来上がった原稿は最終編集責任者がチェックして放送原稿として完成する。政治的な利害と国益が絡むようなニュースは特に念入りに手が入られオリジナルの日本語原稿と寸分の違いがあってはならない。また緊急ニュースなどは時間的に

間に合わないので第一報はとりあえず現場編集者の判断で放送され、次の放送時間帯で訂正したり新たな事実を付け加えて放送するのである。緊急ニュース、例えば災害とか大事故のニュースは刻々と違った事実が明らかにされてくるのでしばしば英語に堪能な編集者がアナウンサーの隣に座り手書きの原稿を書き、アナウンサーがそれを読むのである。まだテレビ画面で放送記者が現場からリポートする場面があるがその際には同時通訳者が待機して生リポートを同時通訳して放送することもある。

緊急放送の場合は即時性が優先されるので必ずしも厳密な内容とは限らないがこれが許されるのは緊急性が事実関係より重要視される場合のみである。

さて英語原稿を書く際にライターがもっとも注意していることは聴取者が聞いて分かりやすい単語を使うということである。聞き手は常に集中して聞いているわけではないので誰にでも分かる単語、できるだけ短い文章、時間的な前後関係が分かる用語、代名詞、関係代名詞を多用しないなどを心がけて文章を翻訳している。また一般的にニュース英語にはスラングは使われない。口語英語は使われる傾向であり come, go, take, get などと副詞、前置詞が結びついた慣用句は多用される。また放送英語では時制は厳密には守られない。例えば Prime Minister Koizumi told reporters that he will visit the United States soon. などの文章は当たり前である。また現在完了形が多用されたり、受動態より能動態が多く、殆どの文章は主語から始まり疑問文や感嘆文は殆ど使われない。また一つの文章の中で同じ単語を使ったり、類似した発音の単語も避けるのが普通である。このようにして推敲に推敲を重ねた原稿をアナウンサーに廻して読んでもらうのである。

#### b. 英語アナウンサーの仕事

このように書かれた原稿を正確に視聴者に届けるのがアナウンサーの仕事である。

アナウンサーはまず揃った原稿をざっと下読みする。ニュースの概要を頭に入れどの項目が重要であり放送局として何を伝えたいのかも把握する。少なくとも3回は全部の項目に目を通し事実関係、英語的に問題ないかをチェックする。固有名詞の読み方、難しい単語の発音などをクリアしておく。その後、ストップウォッチで項目ごとの時間を正確に測る。特に多重放送の場合は日本語のアナウンスと同じ速度で進めなければならない。時計での計測が終わると正確に読めるよ

うに何回も練習する。アナウンサーはまた音声のプレゼンターなので常に声の調子を良くしておかなくてはならない。風邪を引かないようにし、声が枯れないように大声を出さないようにする。また禁煙に徹し酒を控え、ニュース直前に辛いものとか、清涼飲料を飲まないなど常に自己管理が必要である。生放送は何か起こるか分からない。緊急ニュースが入るかもしれないし、放送中に大地震が起きるかもしれない。常に平常心で生放送であることを考え、聴取者から聞いて聞きやすく分かりやすいアナウンスに徹しなければならない。しかしアナウンサーも人間であり失敗もある。その小さな失敗と苦い経験こそがアナウンス技術を成功させるものであり、小さな失敗こそが大きな失敗を防いでくれるのである。日本人で英語アナウンスをする場合、口の開き方、母音、子音の発音、英語のイントネーション、リズムが日本語のそれと大きく違う場合が多いので何らかの助走方法が必要である。日本語を直前にしゃべっていた場合にはアナウンスに入る前に英語モードのメンタリティーに切り替えたり、英語の文章を声を出して読むなどの切り替えが必要である。

英語アナウンサーの仕事はニュースを読むだけに留まらない。番組のナレーションとかまたはスタジオを出てリポートをすとかインタビューに出かけたり、またイベントなどの司会や実況中継、はたまたスポーツ番組の中継などもこなさなければならない。これらの仕事についてはまた後で触れたい。

#### c. 英語アナウンスの実践的訓練法 ・呼吸法

まず呼吸法が重要である。呼吸法は一般的に胸式呼吸と腹式呼吸が知られているが英語アナウンスには腹式呼吸が適している。腹式呼吸の最大の特徴は腹筋と背筋を使うということである。腹筋と背筋を使うことにより、(1)胸筋に無理な緊張を与えないで肺に十分な空気をたっぷりしかも短時間で入れることが出来る。また(2)肺に空気が十分あるので息をスムーズに出し、声を長続きさせることが出来る。さらに(3)のどに不必要な緊張を与えないですむ。また(4)腹筋と背筋の両方を使うために中間の横隔膜の振動が安定し、それが胸筋に伝えられて大きな共鳴振動をもたらす。腹式呼吸は結果的に長い時間、発声することが出来て安定したアナウンスに結びつくといわれている。腹式呼吸を身につけるには長めの英文を一息で読む練習をすること、腹筋を鍛える体操、運動をする、発声練習をする

などがいいとされている。アナウンスの仕事に就く前段階に英語ドラマでキャストをやるといいとも言われている。欧米のニュースキャスターの多くは俳優やドラマ出身の人が多くという事実はうなずけるものである。

また息を長くすることも安定したアナウンスのために必要である。英語ニュースの文章は平均20語以下で書かれていることが多いので20語前後を一息で読めるようになるのが理想的である。そのためには様々な発声法を試したり英語の歌を歌うのも良いしあるいは次のように段々長くなる英文を一息で読めるようにするために nursery rhyme を使って練習することもある。一つ2つ例を挙げてみよう。

- ① This is the house of Bedlam
- ② This is the man that lies in the house of Bedlam
- ③ This is the time of the tragic man that lies in house of Bedlam
- ④ This is a wristwatch telling the time of the talkative man that lies in the house of Bedlam

(Visit to St. Elizabeth by Elizabeth Bishop から)

①②を一息で読むのは難しくはないが④を一息で読めるようになるには練習が必要である。途中で息継ぎをするとどうしても声のトーン、ピッチが変わってしまうことがあるからである。もう一つアナウンサーがよく使う息を長くする練習台としてマザーグースの “This is the house Jack built” がある。

- ① This is the house that Jack built.
- ② This is the malt that lay in the house that Jack built.
- ③ This is the rat that ate the malt that lay in the house that Jack built.
- ④ This is the cat that killed the rat that ate the malt that lay in the house that Jack built.
- ⑤ This is the dog that worried the cat that killed the rat that ate the malt that lay in the house that Jack built.
- ⑥ This is the cow with crumpled horn that tossed the dog that worried the cat that killed the rat that ate the malt that lay in the house that Jack built.

最後の⑥は31語になるので一息で読むには相当厳しいものである。英米の優れたアナウンサーは35語前後でも軽がると一息に読んでいるのを見かける。一息で長い文章が読めるようになると短い文章でも安定したプレゼンテーションが可能となるのである。

#### ・母音の練習

英語アナウンサー向けの訓練にはいくつかのパターンがあるが典型的なものは日本人に苦手な発音を克服する手法である。ネイティブまたはアナウンス経験豊富な日本人にコーチしてもらいながら様々な訓練を行う。例えば良く似た母音を含む単語、文章を繰り返し練習するなどがある。

一例を挙げると日本語の「ア」音のバリエーション練習では次の単語の発音練習を繰り返し行う。例えば：

hut—hat, sung—sang, fun—fan, mud—mad (10回程度繰り返し返して練習する)

そしてこのような単語を含んだ文章を繰り返し読む。

1. The cat had its hair cut.
2. Put the bun into that pan.
3. The travels sometimes causes troubles.
4. The batter was made from butter.
5. My uncle had hurt his ankle.

また日本人は長母音の発音が短母音化しやすいと言われているので短母音、長母音の訓練も重要である。これも単語の練習と文章でも練習を行う。例えば：

hill—heel, sit—seat, ship—sheep, rid—read, lid—lead (10回程度の練習)

またこれらの文章での練習は似たような語を含んだものを繰り返し間違えないように読んでみる。

1. He slipped into pajamas and went to sleep.
2. A dog bit me yesterday. I'll beat him if he bites me again.
3. I've lived here for 10 years but I'm going to leave here soon.
4. That eel must be ill.
5. He did the job very well indeed.

この種の練習は果てしないが様々なバリエーションを作って練習するのが良いとされている。子音の練習も必要である。日本人の弱点は子音に母音を付加させて発音してしまう点がしばしば見受けられる。例えば take の最後の音を ku と発音するとか get に o の母音を付け勝ちになる。これらは詳しくは省略するが意識的に気をつけて練習する必要がある。

#### ・ポーズを入れる

さらに日本人のアナウンスでしばしば指摘されるのはポーズ (pausing) である。会話やスピーチ、朗読などは適当なポーズが入っていると聴きやすいがただ

ずらずらと単語を並べるだけでは聞きにくいものとなる。文章の意味を良く理解して適宜ポーズを入れると聞きやすくなる。ポーズの入れ方のいくつかのパターンを挙げてみると：

(1) センスグループの切れ目

1. He likes apples/but she likes oranges.
2. Before going away/listen to this message.
3. This is John Adams bringing you the latest news/direct from Washington.
4. He went into the room/to read the book.
5. He was just about to read the news/when the lights went out.

(2) 修飾語の後

—the fast/comfortable ride with introduction of the new/bullet train/Nozomi

—one of radio's /first /comedy-quiz and stunt shows--

—the beautiful/highest mountain of Japan/Mt.Fuji

That was the most/exciting/thrilling/topics I've ever heard.

(固有名詞の前)

—the visiting /Japanese Prime Minister/Junichiro Koizumi

—Ladies and gentlemen, the President of the United States/ Mr.George Bush.

—I've visited such cities as /NewYork, /Chicago, /Boston and/ Washington.

—Such politicians as /Mr. Fukuda/Mr. Abe and /Mr. Aso are running for the president .

(聞き取りにくい言葉の前, so called の後など)

—The pollution caused by /the polychlorinated biphenyl/or PCB

—The clothes made from /acrylic fiber

—The new government in the country is so-called/"puppet government."

(動詞の前)

—the big news tonight /is a race between the two parties

—The book they threw /happens to be very important

—President Bush /brought up the issue today.

早いスピードで読まれる英米のニュースでも必ずポーズが入っている。ポーズがあるからこそよく内容が聞き取れるといっても過言ではない。

・何度も何度も音読する

最近、音読を推奨する英語教材などが相次いで出版されているが長年音読を仕事としてきた者として言え

ることは音読はやはり英語習得に有効だという結論である。英文を音読するとその音声は自分の耳と頭蓋骨の両方を通じて脳に入る。この2つの経路を経た音声記憶は濃厚な記憶となって大脳に蓄積されるのではないか。英文は何回も時には何十回も音読するとある時点からすらすら口から出るようになる。実に不思議な現象であるが事実である。音読を始めると最初は声が良く出ず、喉が痛くなる。あまりひどく喉が痛いときはそれ以上喉を酷使しないほうが良いが、多くの英文を読むほどに段々声が良くなって、喉の痛みもなくなってくる。毎日、1時間程度音読を繰り返しているといわゆる「アナウンサーの声」がその人なりに出来上がってくるものである。テレビ、ラジオですばらしい声を持ったアナウンサーが多いが、その人たちも初めからいい声を持った人たちではなかったはずである。10年、20年、30年とアナウンスの仕事するうちにすばらしい声と聴きやすいアナウンス技術を身につけているのである。ではどんな英文を音読すればよいのであろうか。基本的にはどんな英文でもいい。例えば中学、高校時代の英語の教科書でもいいし、英字新聞の記事でもいいし、英文雑誌記事でよい。しかしもっとも良いのは放送用に書かれた英文がよい。幸い今ではネットからダウンロードすればある程度の放送原稿が手に入る。ちなみにNHK国際放送の毎日のニュースの一部が音声、映像と共に公開されているのでそれを利用するのも良い。

・実際の英語放送原稿を読んでみる

例えば2006年5月12日午後に次のようなニュースが登場していた。1, 2項目をダウンロードして分析してみる。まず円高のニュースがトップで取り上げられていた。外為のニュースがトップに来ることはまれであり、如何に急激に円高が進んだかを物語っている。次の様な内容である。

In Tokyo foreign exchange trading, the yen was trading in the 109-yen-to-the-dollar range on Friday morning.

That's the yen' highest dollar exchange level in eight months. The rise reflects expectations that the gap will narrow between US and Japanese interest rates.

The yen briefly hit 109.90 to the dollar on Friday morning.

As of noon, the yen was trading at between 110.27 to 110.32 to the dollar, up 1.19 from Thursday.

The yen might stay strong, as traders anticipate an end to

US interest rate hikes after the announcement of worse-than-expected US economic figures on Thursday.

They also note that Japan is soon expected to end its zero-interest rate policy.

これはニュースの一項目としては標準的な長さであり大体45秒程度でアナウンサーは読むのである。練習する場合、最初はゆっくりと読み段々スピードを上げていく練習をする。このニュースには読みにくい数字が何回も登場するが数字は心持ちスピードを落として読む。数字は聴取者にとっても聞きとりにくいからである。大体このような英文を十回程度読むと普通は大分すらすら読めるようになる。これは実際放送された原稿であるが見て分かるように取り立てて難しい単語はない。文章も短い。これもいかに効果的に聴取者の耳に届けるかがアナウンサーの技術次第なのである。簡単にこれも読む場合の注意点を述べてみると：まず最初の文章はオープニングなのでやや高めの声で聴取者の関心を喚起する必要がある。まず強調すべきは Tokyo foreign exchange trading である。そして 109-yen-to-the-dollar がこの文章で最重要な内容であるのでここを強調して読まなければならない。次の文章で重要な箇所は highest dollar exchange level in eight months であるのでここもやや声を上げて強調しなければならない。しかしどの文章も全て強調しているといわゆるメリハリが利かなくなってしまう、平板な読み方と変わりがなくなってしまう。従ってこの直後の文章 The rise reflects expectations that the gap will narrow between US and Japanese interest rates. はやや声を落として非強調で読まなければならない。次に実際、円ドルはどのようなレートで取引されていたかを語る文章 As of noon, the yen was trading at between 110.27 to 110.32 to the dollar, up 1.19 from Thursday は淡々と事実を述べる感じで数字を分かりやすく読むのがコツである。最後に重要なメッセージとして They also note that Japan is soon expected to end its zero-interest rate policy. これはややゆっくり相手にことの重要性を伝える気持ちで読まなければならない。

数字が多い原稿は読みにくいものである。それは聞き手にとっても同じことなので如何に聞く側がたやすく理解できる読み方が出来るかが問われている。仮にも数字を読む途中でつかえてしまうことがあってはならない。

このような外為のニュースと常にペアで登場するの

が株式ニュースである。東証は世界の注目市場であるので常に毎日の状況を発信する必要がある。

Tokyo share prices plunged across the board on Friday morning, following a New York stock plunge and reacting to the sharp rise in the yen's value against the dollar.

The TOPIX index of all first-section issues closed the morning at 1676.59, down 34.72 from Thursday's close.

The Nikkei average of 225 selected issues was at 16451.05, down 411.09.

Traders say export-oriented issues such as automakers and high-tech-related firms led the stock decline.

外為ニュースの後に来るのが常であるので「一方株価はこうです！」という意気込みで伝える必要がある。最初の文章の前半部分 Tokyo share prices plunged across the board on Friday morning, は特に強調してよむ必要がある。株価下落は plunge が定訳でありもともと分かり安い言葉である。最初の文章の後半は意識的に声を落として付け加えるように読む。二番目の文章の The TOPIX index of all first-section issue は長い主語であるので一気に読まなければならない。数字の 1676.59, down 34.72 は当然、ややゆっくりと正確に読まなければならない。次の文章の 225 selected issues was at 16451.05, down 411.09. も同様に正確につかえないように読むことが大前提となる。最後の文章はニュースの「締めくくり」であるので説得する心構えでややゆっくりと読む。

全てのニュース原稿について検証は不可能であるが多くの共通点をどのような英語ニュース原稿であっても見出すことが出来る。まず第一に聞き手に分かりやすいアナウンスでなければならない。例えば良い英語文章でなくても工夫して「どうしたらよく分かってもらえるか」という姿勢が必要である。ニュース現場は緊急ニュースなどの時には修羅場と化すのでスタッフ全員に大きな負担がかかってくる。極端な例では原稿が全くない状態で放送しなければならないこともある。隣にいるディレクターの伝える日本語を即座に英語に訳して放送しなければならないこともある。また放送中に大地震に見舞われてその感想を生で英語で伝えなければならないかもしれない。アナウンサーが動揺してしまっただけでは状況が伝わらないので常に冷静に自分をコントロールしマイクに向かうことが求められる。アナウンサーによっては知り合いの顔を思い浮かべてそ

の人に伝えようとするのが良いという人もいる。

・様々な教材，メディアの利用

まず英米の良いアナウンスを沢山聴くことであろう。今やTVやCDなどで容易に英米のアナウンスに接する事ができる。彼らの表現，発音をじっくり聞いて出来れば録音，録画して何回も聞くことである。その後その読み方を真似して自分の英語を録音してみると良い。

初めは英米のキャスターとの差に愕然とするが何十回も練習するうちにある程度上達してくるのが分かる。この様な英語の読み方練習は出来れば毎日続けると良い。喉，口の筋肉は日本語と英語をしゃべるときとは大きく違う。久しぶりに英語をしゃべると口が良く回らないのはよく経験することである。

・ネイティブと話す

さらに知人にネイティブがいたら自分の英語を聞いてもらおうとよい。彼らがどのように受け取るかは重要な指針となる。日本で殆どの英語教育を受けた日本人がネイティブと同じように英語アナウンスをするのは殆ど不可能である。

今，問われているのはネイティブと同じアナウンスではなくて，分かりやすい英語と説得力を持つアナウンスと言われている。日本のニュースを海外に発信する場合，キャスターの日本的なフレイバーを持ったアナウンスは寧ろ説得力と信憑性を持ち歓迎されるというコメントが多く寄せられているという。もちろん英語アナウンサーは限りなく良い英語のネイティブの発音に近づく努力を惜しんではならない。

さらに英語アナウンサーとしての幅を広げるためには多くのネイティブと日常会話を交わしコミュニケーションの技術を高めることが重要である。

・様々な口語英語にチャレンジする

書かれた英語だけを読んでいると生きた人間とのコミュニケーションの妙，醍醐味が身につかない。生放送ではどのような状況が起こるか分からないので常に原稿なしでも英語がしゃべれるように備えていなければならない。また仕事の範囲も単位ニュースを読むだけでなく，出来るだけ幅広く英語アナウンスに関する仕事を手がける必要がある。例えば外に出て英語インタビューをすとか英語イベントの司会をしたり，英語スポーツ実況を試みるとか様々な英語アナウンス体

験を積むことによって英語アナウンス自体も向上してくる。

人によっては一日の出来事を英語でしゃべる，英語で独り言をいう，日本語のテレビ，ラジオ放送を即時通訳してみる，英語ポップスを歌う，洋画を繰り返し鑑賞し，セリフと字幕を比べてみるなどそれぞれに合った方法でしゃべる英語に触れることが必要であろう。

・英語ドラマ，朗読大会，スピーチコンテストに参加する

これは学生中心の活動に限られてしまうが英語ドラマのキャストとして多くの舞台を踏むと発声法，人の前で話す際の度胸がつく。またスピーチコンテストに数多く参加すると限られた時間内でしゃべる訓練が出来るし，英語のフレーズを暗記する習慣が身に付く。

学生以外でも最近は大きな都市では英語好きが同好会を作っていて毎週一度集まって英語劇をやったり，英語朗読大会をやったり，スピーチ発表会などをやっている例が数多い。

## 6. ま と め

2006年5月現在，小泉総理の発案で始まった国内における英語放送チャンネル創設が近い将来実施される見通しが濃くなっている。このことの実現には財政的，人的要素，放送内容，視聴者リサーチなど多くの問題を抱えているかもしれない。この新たな英語放送チャンネル実現と引き換えにNHKは現在テレビ，ラジオ合わせて8波持っている放送電波の中からテレビ，ラジオからそれぞれ1波ずつ減らさなければならないという意見が濃厚となっている。どの波もそれぞれ定着しそれぞれの役割を持って歩んできただけでもし，2波減少となった場合，現場の混乱は必至であろう。しかし公共放送は常に国民と共にあり，英語チャンネル創設，既存放送2波停止が国益となるならばこれも新たな出発となるであろう。確かに国内で英語チャンネルが出来れば国際化は進み，国民の英語放送への関心も高まるであろう。英語を学ぶ人，教える人間にとっても大きな選択肢ができるわけであり歓迎すべき点もある。ただし英語放送現場を多少知る人間にとっては，短期間で見るならば制作現場は忙しくなり大変であろうと予想される。放送時間の長さにもよるがもし現在の総合テレビ並みの放送時間帯を設定することはすく

には実現不可能であろう。高い英語能力を持ったスタッフが大量に必要とされるからである。最後に英語をチェックするネイティブの数も限られている。放送時間を埋めるニュース以外の英語番組、リソースも十分とはいえない。5年計画くらいの余裕がないとなかなか実現はむつかしい。

しかし明るい面から見れば英語チャンネル創設は放送におけるいわば革命であり新たな文化、教育、需要の創設になるかもしれない。日常いつでも英語ニュースが聴けたり、番組をみる事が出来れば国民の英語アレルギーとか英語嫌いが減るかもしれないし、英語教育が根本的に変わるかも知れなし、大学には放送英語担当者を育てる学科、学部が出来るかもしれない。英語チャンネル創設の話は放送関係者にとって初めての取り組みであるしメディア英語教育に携わるものにとって画期的な関心事である。さらに2011年には全国でアナログ放送が中止され地上デジタル放送が全国を遍くカバーすることになる。デジタル放送は大量の情報を送ることが出来、しかも双方向通信が可能である。英語関係の番組が増え、送り手と受けて側から双方に情報をやりとりすることが可能であり番組コンテンツの可能性が無限に広がる。現在での番組感覚とは大きく違った発想が出てくる可能性がある。

日本は情報輸入過多で情報輸出はきわめて少ないといわれて久しい。小泉総理はまた日本の事情をもっと海外に知らしめるために更なる日本発英語放送の拡大、充実についても言及した。今後ますます日本発の英語放送、情報発信が叫ばれることになるかもしれない。ある国の事情を世界に知らしめるためのメディアの役割はきわめて大きい。外交官や民間の人々の交流も国際関係において重要だがメディアとくに放送はその即時性という点で極めて有効な手段であり今後もインターネットの役割と同様に放送は大きなインパクトを持ち続けるであろう。

## 参考文献等

- 1) NHK ワールド (NHK 国際放送) 2006年5月12日、午後12時英語ニュース (日本時間) インターネット音声及び放送原稿
- 2) NHK 英語講座テキスト5月号 (日本放送出版協会)
  - 「新感覚☆キーワードで英会話」
  - 「3ヶ月トピック英会話」
  - 「テレビで留学! ~コロンビア大学初級英語講座~」
  - 「いまから出直し英語塾」
  - 「見に英語会話 とっさのひとこと」
  - 「徹底トレーニング英会話」
  - 「ビジネス英会話」
  - 「ものしり英語塾」
  - 「基礎英語 I」
  - 「基礎英語 2」
  - 「レベルアップ英文法」
  - 「英会話入門」
  - 「英会話上級」
- 3) Progressive English Japanese Dictionary, Shogakukan, 1998
- 4) 小池直己「放送英語と新聞英語の研究」北星堂, 1998
- 5) The Concise Oxford Dictionary of Current English (Clarendon Press), 1995
- 6) The Random House dictionary of English Language. The Unabridged Edition (Random House), 1979
- 7) 古明地勝美・貝瀬千章「英語アナウンス入門」アルク社, 1979

